

北 鯨 会

ニュースレター

No. 10



2016年11月
(名古屋工業大学同窓会北海道支部)

同窓会北海道支部では年1回支部総会を開催し会員の親睦をはかっています。しかし、北海道は広いので全員が集まるのは困難な状況にあります。そこで約60名の同窓生の相互理解を広めるため、ニュースレターを発行しています。おかげさまで今回10号を発行することができました。これも皆様のおかげと感謝します。

以下に同窓生の情報を掲載します。

同窓生情報

氏名（敬称略）（卒業年・学科記号、現在の居住地）で、卒業年順に記載されています。

佐藤 昌治（M40、苫小牧市）

トヨタ自動車北海道を退職後、苫小牧にお住まいで、サンデー毎日の生活を楽しんでおられます（「ごきそ」2016年1-2号より転載）。

宮入 紀行（F40、岩見沢市）

卒業後9年間マツダに勤務された後、家業を継ぐため、北海道岩見沢市に戻られました。退職後フィリピンセブ島に移住されて7年間英語の勉強をしておられました。平成26年に日本に戻られました（「ごきそ」2016年1-2号より転載）。

高田忠彦（Y41、江別市）

「ローテク」三昧 その2

〈除染技術とオールドセラミックス〉

「文殊の知恵」どころか「もんじゅの馬鹿」と見放され、役立たないまま廃炉と化す、核燃料サイクル、夢の原子炉ともて離された高速増殖炉「もんじゅ」。「馬鹿は死ななきや」と言いますが、「もんじゅ」は死んでも放射能の付けをいつまでも残します。これまで3兆円以上の税金を使い、推進してきた人たちは誰一人責任を取らなくて良い日本。

それはとも角、「廃炉ビジネス」という言葉が聞かれる昨今です。ところが、それを担う技術者となると、これから育てるとというのが実態です。こうした中で文科省は、福島第一原発の廃炉問題もあり、一昨年9月に廃炉に向かうための人材育成事業をスタートさせました。

この事業の一翼を担う東工大はそのプログラムの除染技術に私のローテクを採用し、深化させています。しかし、無償です。人材育成という事業だから協力してもらいたいと言うのが文科省の言い分だそうです。打合わせの旅費も自前ですので、子供からは「オヤジの馬鹿」と言われています。

ところで、セラミックスの源流は陶磁器、やきものです。しかし、この分野はオールドセラミックスと呼ばれ、大学などの研究機関からその姿を消そうとしています。そして、ニューとかフラインと呼ばれるセラミックスが肩で風を切っています。

しかし、除染技術ではオールドパワーがその力を発揮します。やきものは粘土などの天然鉱物を使用しますが、これらの主成分はシリカ（ SiO_2 ）、アルミナ（ Al_2O_3 ）です。やきものが焼くことによって強く、丈夫になるのは、シリカ、アルミナと土や石に含まれる塩基成分、ナトリウム（Na）、カリウム（K）、マグネシウム（Mg）、カルシウム（Ca）などと反応してしっかり結合するからです。

福島第一原発から放出され、環境を汚染しているセシウム (Cs) は、Na や K と同じ化学的性質を持つアルカリ金属元素です。また、放射性ストロンチウム (Sr) は、Mg、Ca と同じ仲間のアルカリ土類金属元素です。これらはやきものの主成分である SiO_2 、 Al_2O_3 と反応し、ガラス相や結晶を作り、やきものを強固にします。

やきものが熱や酸などの科学的侵蝕にも強く、虫や微生物などの食害も受けないのは、やきものの成分とそれらの結合状態にあります。800℃ぐらいの低温で焼き、あまり強くない縄文式土器でさえ、地中に埋設しておけば1万年以上も持つことが検証されています。

このやきものの技術を応用すれば、最終処分を見越した除染技術が開発できます。この温故知新の技術が私の老テクの基本です。

セラミックスのオールドとニューの違いを原料という切り口で一言で言えば、天然原料をそのまま使うか、高度に加工して使うかの違いです。除染技術は、コストの面から見ても、当然ながらオールドセラミックスの方が実用的です。

この技術に使用する原料は、すべて北海道の天然鉱物で賄うことができます。オール北海道の「文殊の知恵」で、除染という国民的課題に応えることができればと願っているのですが。「馬鹿は死ななきや」ということですか。

三田村好矩 (F41、札幌市)

「計測工学科卒業 50 周年：計測工学って何だ」

今年 (2016 年) は、私が計測工学科を卒業して 50 周年の年です。このため平成 28 年 5 月 19 日、初夏の爽やかな日に、名鉄犬山ホテルでクラス会が開かれました。当日は北海道から広島までの各地から 12 名が集まりました。また、恩師の小和田正先生にも出席していただきました。残念ながら逝去された同級生が 9 名おり、会の初めに皆で冥福を祈りました。50 年ぶりに会う友達もおり、名前が思い出せない同級生もおりましたが、夜の 2 次会の頃になると全員が 50 年前の学生時代にもどって、学生時代の思い出話に夜の更けるのも忘れて話し込みました。同級生のありがたさを改めて感じた次第です。

翌日は全員で名古屋へ行きました。初めに名古屋駅前でビルがすっかり変わっているのを見て、驚きました。ちょうど大名古屋ビルヂングが解体された後に新しいビルに生まれ変わった直後でした。

その後、名工大を訪問しました。卒業生連携室の方に大学内を案内してもらいました。図書館の外観は昔と変わっていないように見えたのですが、内部はすっかり変わっていました。図書館というよりメディアセンターといった方が適当でした。書籍のほかデジタル媒体が多くあり、またコンピュータが数えきれないくらいありました。図書館にある資料を利用するというより、ネットワークを利用して世界中にある資料を利用するようになっていました。また、図書館の入退室および本の貸し出しもすべて学生証で行っていました。

最後に鶴飼裕之学長を表敬訪問しました。鶴飼学長は計測工学科の卒業生であるため、表敬訪問を快く受け入れてくれました。学長から現在の名工大の状況について説明を聞きました。今年度から 6 年一貫 (学部 4 年と大学院修士課程 2 年の一貫教育) の教育を日本の大学で初めて始めたとのこと。また、学科を 5 学科にまとめたとのことでした。名工大改革への学長のなみなみならぬ意欲が感じられ、参加者一同感銘しました。

アツという間のクラス会でした。再会を誓って解散となりました。

54年前の大学受験の時、当時全国に4大学にしかない計測工学科が名工大にあるということで受験しました。電気、機械、化学などの専門を深く学ぶより、これらの分野を横断的に学びたいと計測工学科へ進みました。

入学当時から、計測工学科の学生間で計測工学って何だの議論がよく行われました。狭義の計測工学は文字通りものを測定することで、あらゆる工学分野でこれがなくては、工学は成り立ちません。この計測の基になるのが単位です。基になる原器や現象を基準にして対象としているものが何倍になるかを求めるのが計測です。このため、単位がきわめて重要になります。大学教員として約35年を過ごしましたが、学生実験のレポートで目についたのが、数字だけあって単位のないもの、単位の間違っているものでした。このため講義では単位の重要性を重ねて強調していました。

ところがある日、ラジオを聴きながら仕事をしているとラジオから、「世の中で大切なものには単位がないんだよね」という会話が流れてきました。これを聞いてドキッとしました。話を聞いてみると、人間の価値、幸福度、美しさなど単位が付けられない大切なことがあるという内容でした。単位があるということは、大小関係、上下関係が存在することを意味します。世の中には単位のないもの、すなわち大小関係や上下関係が決められない大切なものがあることを指摘され、単位ばかりに気をとらえられていた私にとって衝撃でした。

計測工学科を卒業して50年、計測の有効性と限界を知りました。

秋山 秀雄 (Es43、札幌市)

「コンビニ・マン」

“コンビニ・マン”とは私がコンビニエンス・ストアに入り浸っているという意味ではない。“便利な男”という意味である。

そう、私は便利な男なのである。こうなった所以は私が第二の就職をしたときに遡ることになる。私は第一の職場を53歳のときにリタイアして第二の職場に入ったが、そのときからこの職場を去る時には“もうお金を稼ぐ仕事には就かない”という気持ちになって行った。その理由は明確ではないが、以前記述したように学生時代にカトリック教会に繁く通ったことが私をしてそういう気持ちにさせたのだらうと思われる。「お金をいただく仕事を40年間ほど続けてきたのだから、もうこれからは自分の持てる力で世間の皆様にお返ししよう。」という気持ちになったのである。

すぐできる身近なものはボランティアかと思い、札幌市主催のボランティア講習会にも通ってみた。ボランティアなどは退職—即—ボランティアではなかなか大変（特に男は）ということも耳にしていたので、家内と共に森林の保護・育成を行うボランティア団体に入会し雪のない8ヶ月間のみ月1回の山林内作業に参加することとした。この団体は営林署などに勤務していた方が退職後役所の外郭団体として身につけた技術を生かして森林の保護・育成を支援する会である。以前から植物特に樹木に愛着があった私としては作業を通じて樹木の勉強もできたので、全く楽しいものであった。植樹、下草刈り、枝打ち、間伐などの作業があり、チェーンソーの使い方・メンテの仕方も身につけることができた。春には拝みたくなるような山菜や仕事帰りに温泉入浴(勿論自弁)にも恵まれ北海道の自然を満喫させていただいた。

もう一つ、私の第二の職場は札幌市北区に所在していたが年1回会社の地域活動として“修理とフリーマーケット”を開催することとし、近隣の民家に1,000枚ほどチラシを投げ込んだ。修理は=包丁・鋏研ぎ、自転車のパンク、傘の破損、フリーマーケットは=衣類、食器、その他小物

の販売である。修理をする催しは余り例が無いようで毎年大盛況で遠くからも来られる方がおられた。売上金は全額前述の森林保護団体に寄贈させていただいた。

このような準備の成果があったためか、退職後のボランティアは何の抵抗も無くすんなりと進めていくことができた。本格的にボランティアを始めて9年弱になるが現在の私の一週間をご紹介します。月曜日-A小学校で図書の修理、火曜日-B小学校で図書の修理、水曜日-白石区民センターおもちゃ病院でおもちゃの修理（またはE小学校で図書の修理）、木曜日-C児童会館で図書の修理（またはN公園で子供の工作支援）、金曜日-D小学校で図書の修理そして土曜日は私的な習い事とびっしり日程が詰まっている。さらにボランティアに来られる方に「家庭で研ぎ物や小物家電品など壊れたものがあつたら持ってきて下さい。」と声を掛けているので、我が家にはいつも何か修理品が滞在している。高齢になったら“きょういく と きょうよう”が必要というジョークのようなことが言われるが、今のところそれはクリアーしているようである。私は更に“けんきゅう”＝健康と休養を付け加えたら良いと思う。（次回に続く）

山平 英夫 (C43、札幌市)

北海道庁に勤務しておられました。その間11回の転勤をされました。現在は退職され、近くに住んでおられるお孫さんの世話で忙しくしておられます（「ごきそ」2016年1-2号より転載）。

浅井 信和 (D45、更別村)

「近況」

「北海道に移住してまもなく11年になります。

この1年の大きな変化は、入院し手術を受けたこと、それを機に勤めを辞めて365連休の身になったことの2点でしょうか。

入院・手術と言うのは、足の神経（その痛みで10数年悩まされてきた）の腫瘍摘出手術で、10日間ほどの出来事でした。

勤めというのは、農水省の交付金を使った農村活性化の事業の事務を9年近くしていました。なんとか後任に引き継ぎできたため、

後顧の憂いなく時間を自由に使うことができるようになりました。

その結果、再び妻と二人三脚しながら庭で野菜作りに精を出す1年でしたが、今年は曇りや雨ばかり。8月後半には台風が3つも4つも来る有様で、結果は散々でした。そのくせ雑草だけはどんどん生長して種を付けるので、暇さえあれば草取りに追われています。田舎暮らしも楽しいことばかりではないと実感しています。」

田上 利明 (C47、旭川市)

現在、設計測量会社の会長をしておられます。健康維持のため、年間100回を超すゴルフを楽しんでおられます。（「ごきそ」2016年1-2号より転載）。

及川 善史 (M47、札幌市)

ホクレンに勤務の後、現在はホクレン肥料に勤務しておられます。仙台におられるお孫さんとSkypeでの会話を楽しんでおられます（「ごきそ」2016年1-2号より転載）。

赤澤 稔彦 (Y53、苫小牧市)

「近況」

今年4月から少しのスリム化と健康増進を目指し週3回のジム通いを始めました。5kgの減量と多少の体力増強は図れました。

結婚30年を記念して家内とハワイへの1週間の旅行を最近行ってきました。暫くぶりに海で泳ぐことが出来ました。

佐川 正人 (C53、札幌市)

清水建設に就職され、平成4年に北海道に転勤されました。退職後は、札幌でISOやmanagementの審査に関する仕事をしておられます。大学時代はワングル部に所属されておられ、現在は、土日にご夫妻で登山を楽しまれておられます。夏には北海道の屋根の大雪山系を縦走されました（「ごきそ」2016年1-2号より転載）。

浅野 一郎 (C54、札幌市)

金沢での勤務の後、札幌に転勤されて3年目です。大学時代は自動車部、麻雀で忙しくしておられたそうです（「ごきそ」2016年1-2号より転載）。

大参 智 (Y56院、札幌市)

愛知県安城市のご出身。松下電器セラミック部門に就職され、北海道松下へ転勤されました。56才のとき早期退職され、小樽商科大学ビジネススクール（大学院修士課程）に入学され、修了されました。現在は、同博士課程でエンジニアリングのマーケティングを研究しておられます（「ごきそ」2016年1-2号より転載）。

柴山 和雄 (W57、北見市)

経歴

1. W59
2. 陸上自衛隊 13年間勤務
燃料教官、日米共同訓練、阪神大震災の災害派遣対応等を実施
3. 北見市において酪農
5年前より放牧酪農に転換
御上の施策である大規模化には従わないで、
夫婦二人で楽農を満喫しています。

近況

15年後を目途に
後継希望者が回り道をしないで
牧場に就農できる環境を整えています。
一方で、息子たちは仕事に忙しすぎて、
私のような老兵を相手にする余裕がないので、
孫の成長を写真を通して楽しんでいます。

山岡 千秋 (ZW3、岩見沢市)

「木のいのち木のころ」

今回の原稿依頼に対し、あらためて自分の読書人生をまずは振り返ってみることにしました。

小学校時代は学校の図書館の偉人伝を読みあさり、友の影響で江戸川乱歩や戦記物を、中高はもっぱら受験参考書でしたが、学生時代は評論に夢中になり、そして歴史小説へ。こうしてみると「趣味は読書」と言ったことはありませんが、結構読んできたなあ、と。その中で大人になって三回読み返した本は二冊。その一冊が今回ご紹介する西岡常一著「木のいのち木のころ」です。

仕事をしながら主に私はNHK ラジオ第一放送を聞いています。その中で、著書の紹介がてら西岡さんの半生を振り返るインタビュー番組をたまたま聞いたのです。そしてすぐさまこのドマイナーな本を探しに本屋に走りました。まだ仕事を始めたばかりの頃でしたね。当時はただただ内容の面白さに惹かれました。西岡さんの仕事に対する真筆な姿勢、木、つまりは材料の話、道具、技術の継承や歴史との関わり合い、さらには教育観について等々。

自分も一応ものづくりという職業のはしくれにあったものの、当時は技術や素材について学ぶべきことがどっさり在りそうなのに何から手をつけたら良いのか判然としない頃。西岡さんの話は、当然雲の上のようなことばかり。

が、若い時に読んでおいたことが、今になっていろいろな面で役に立っているな、と。この年になってやっと気が付いた訳ですが…。知識も技術も経済活動も、身に付ける時は個別の学びになります。学びを重ねるとそれぞれが有機的に結び付くようになってきて、そのことが陶芸の場合には歴史的背景とも相まって新しい発見に繋がることがあります。だから学びはやめられません。

さて、すっかりこのコーナーらしからぬ抽象的な話になってしまいました。内容の紹介はいつかって？ どうやら誌面に限りがあるので、興味がある方は本屋で探して読んでみてください。

ちなみにもう一冊は？ と思った方に回答をしておきましょう。山岡荘八「織田信長（全5巻）」です。自分は出来ないとわかっていながら、信長の生き方に憧れたんですよね。でも今はいいかな、もう少し長生きしたいので。「人生五十年」に自分ももうあと一年になりましたから。

（「これっと」No. 9, 2016 より）